海外ボランティア活動報告書　　２０１１，９，２８（水）提出

法学部政治学科２年　安田絵美
１０-０１２-２３５

訪問先　　フィリピン・マニラ市内周辺
期間　　２０１１年８月２３~２９日（６泊７日）
主催機関　ＳＹＤ（公益財団法人修養団）
参加プログラム名　ボランティアアクション in フィリピン
参加費用　８万５千円＋燃油サーチャージ１万５千円

＜プログラム内容＞
１日目　オリエンテーション、マニラ着、就寝
２日目　午前/出し物練習（ダンスや手話など）　午後/ナボタス市水上生活者訪問
３日目　午前/サン/マテーヨ市長を表敬訪問　午後/山間部の小学校訪問
４日目　午前/パラダイスハイツ訪問　午後/ステージングエリア、パヤタス訪問、ホームステイ

５日目　学資支援している子供たちを遊園地に招待
６日目　午前/市内観光　午後/ショッピングモールで買い物とマザーテレサの家訪問（死を待つ人々の家、喜びの家）
７日目　帰路（成田着）

＜主な活動内容＞
・小学校訪問やホームステイを通じて現地の人々との交流
・支援袋（学資用品や生活雑貨入り）や食糧の配給
・学資支援している家庭を遊園地に招待
・見学・視察（ナボタス市水上生活者、ステージングエリア（旧ゴミ捨て場）、サン・アグスチン教会などの市内観光、マザーテレサの家など）

＜参加の動機や感想＞

私は、大学１年を何もせずに終わったことを後悔して、2 年はアクティブに様々なことに挑戦しようと思い、その一環として SYD の「ボランティアアクション in フィリピン」という活動に参加しました。私は、初めての海外で初めてのボランティアだったので緊張と不安でいっぱいでした。

2 日目のナボタス市の水上生活者を訪問したときのことです。写真で見ていましたが、実際に自分の目で見ると、そこには独特な雰囲気があって、カルチャーショックを受けて、今までの自分の考えの甘さにふがいない気持ちになりました。真っ直ぐ前を見て歩けませんでした。でも、帰り道の私はそうではありませんでした。水上にある学校を訪問すると、たくさんの子供の笑顔が私たちを待っていたからです。こんなにも人の笑顔に心を動かされたのは初めてのことでした。土地代が払えないという家庭の事情により、家の手伝いの為に全員が学費無料の小学校に通えているわけではないけど、そこにはたくさんの笑顔がありました。そして、4 日目には、スモーキーマウンテンとパヤタスを訪問し、子供たちと交流しました。そこでは、昔ゴミ捨て場でスカベンジャーとして働いていた人たちが暮らしています。(今現在も働いている人はいます。)
とても衝撃的で、印象に残る場所でした。「パラダイス･ハイツ」という場所に政府によって押し込められた人たち、そして未だに残っているゴミ捨て場とスカベンジャーは監視員のもと撮影禁止区域でした。国家としての汚点は隠そうとする政府の意向があるように私は感じました。
また、法律上彼らはそこに居住していないことになっています。フィリピンにおける、格差社会の根底にある問題点を垣間見た気がしました。そこに暮らす人々にとっては非常に厳しい生活ですが、やはり笑顔がいっぱいあって、改めてフィリピンの人たちは心が豊かなのだと思いました。日本はフィリピンよりはるかに生活水準は高いですが、フィリピンの方がはるかに幸福度は高いと思います。また、夜には、SYD が学資支援している子供たちのお家にホームステイしました。私は、グレチェンという大学 2 年生の女の子のお家でした。スモーキーマウンテンとパヤタスの衝撃的な現状を見て、精神的に参っていた私ですが、グレチェン一家の優しさと温かさと笑顔に触れてとっても充実したホームステイとなりました。子供たちはタガログ語で喋るので、何を言っているのかさっぱり分からなかったけど、シャボン玉やボールで一緒に遊んだとき、言葉なんて道具でしかない、心が大事なのだと思いました。ホームステイは滅多にできる体験ではないので、充実した SYD のプログラムに感謝です。グレチェン一家は、私たちに 1 つしかないベッドを譲り、ひとつしかない扇風機を向けてくれました。7 人ほどで 2 枚の布団で雑魚寝をしてくれました。日本ではお金を払えば良いサービスを受けられます。その一方で私は、フィリピンで本当に心からのプライスレスな、今まで受けたことのないおもてなしを受けました。そして次の日は、子供たちと遊園地に行きました。彼らにとって、1 年に 1 回の夢の時間です。私は連日の疲れで眠かったのですが、待ち時間は子供たちと思いっきり遊びました。子供たちの笑顔を見ると、遊ばずにはいられなくなっていました。バスが渋滞で来なかったので、動物園状態でワイワイしていて、それだけで楽しかったです。行きのバスでは硬い表情だった子もいたけど、遊園地での子供たちの表情は輝いていて、本当に夢の時間でした。そして、子供たちが乗った帰りのバスのお見送りは、本当に寂しくて切なかったけど、台風のなか最後まで皆で手を振っていたことを私は忘れません。そしてフィリピンでの最後の 1

日は市内観光とマザーテレサの家の訪問でした。市内観光の一環としてアジア最大のショッピングモールに行きました。同じフィリピンとは思えないほど大きくて立派でした。格差社会の現実を自分の目で見て感じました。そして、最後のプログラムのマザーテレサの家はとても緊張しました。財源に限りはあるし、治療を受けられない前提で入居している人々ということもあって、薄暗くてどんよりとした空気だろうなという先入観があったからです。でも実際は大人も子供もとてもフレンドリーで楽しかったです。帰りのバスではあっという間だった 1 週間を振り返りました。夜の最後の評価会と瓜生さんの貴重なお話を聞けたことも強く胸に残っています。ここに書ききれないほど多くの経験をして、「学ぶ」というよりは「感じる、考える」ことが多かった 1 週間。特に、フィリピンの人たちの屈託のない笑顔と、温かい人柄が印象に残っています。そして、楽しい、悔しい、切ない、嬉しい…本当に色んな感情を共有できた SYD11 期生はかけがえのない仲間です。フィリピンでの経験を活かして、これからもいろんなことにチャレンジしていこうと思います。

以下、ボランティア活動中に撮影した写真を載せておきます。

これは水上生活者を訪問した時の写真です。生活排水もあり、家付近の海は若干汚れています。何年か前に訪問したときは、足場が悪く落ちた参加者もいたそうです。また、最近では電気も通っていますが、「盗電」だそうです。（フィリピンでは電気代が高いです。）

こちらはパラダイスハイツ付近にある旧ゴミ捨て場のスモーキーマウンテンです。
１９９５年頃からゴミは運ばれなくなり、自然の力で復活しましたが、近くでみると、ゴミの残骸のように黒い部分がありました。

こちらも旧ゴミ捨て場だった場所の写真です。背景と対照的な子供たちの笑顔が眩しく、力強さを感じました。フィリピンの人々はとてもフレンドリーで目が合うと手を振ってくれます。人の温かさを再確認した１週間でした。

こちらは旧ゴミ捨て場で今も若干のスカベンジャー（ゴミ拾いによって生計をたてる人）がいました。しかし、それは国家としての汚点を隠すためか、監視員がいてこれ以上近くでの撮影は禁止でした。隠すのではなく改善することが肝要なのだと感じました。

街中ではこのようにお店などで監視員がいるのが目につきました。貧しい人々が店に入ってこないようにするためです。彼らが我々の領域に来ることには境界線がありますが、我々が彼らの領域に入るのに境界線はありません。そこに足を踏み入れた以上は責任があるのだと再認識しました。

こちらはホームステイ先の家族と撮った写真です。子供たちはタガログ語（現地の言語）を話すので理解できませんでしたが、シャボン玉やボールで思いっきり遊びました。言葉はツールでしかないと実感しました。

１年に１回の夢の時間の遊園地です。私たちが「招待」したのですが、私たち日本人のほうが楽しませてもらった気がします。夢の時間だった分、お別れが寂しくて切なかったです。

百聞は一見にしかずというように、まだまだ載せたい写真はたくさんあります。是非とも、プレゼンテーションでたくさん紹介して、私の体験したこと感じたことを伝えたいです。